

### 3 夢ある建築家への磨き

#### 3. 2 充実した大学院の生活



**イギリスゴシック風の建築に囲まれたイェール大学の  
メインキャンパス、正面がメインライブラリー**

その他に特別教授として招かれたドイツの有名な建築家ハンス・ホラインや、ニューヨークのヒュー・ハーディー等のデザインスタジオでも、彼らとよく話すことが出来た。

又、毎週のように、有名な建築家のスライドによる彼らの作品の紹介と、建築のレクチャーがあった。彼等は天才的な才能を持っているというだけでなく、人一倍の努力家であり、学生に教える態度は真剣そのものであった。学生と共に学ぼうという態度で、夜遅くまで一緒に製図室に残って、教えてくれた。

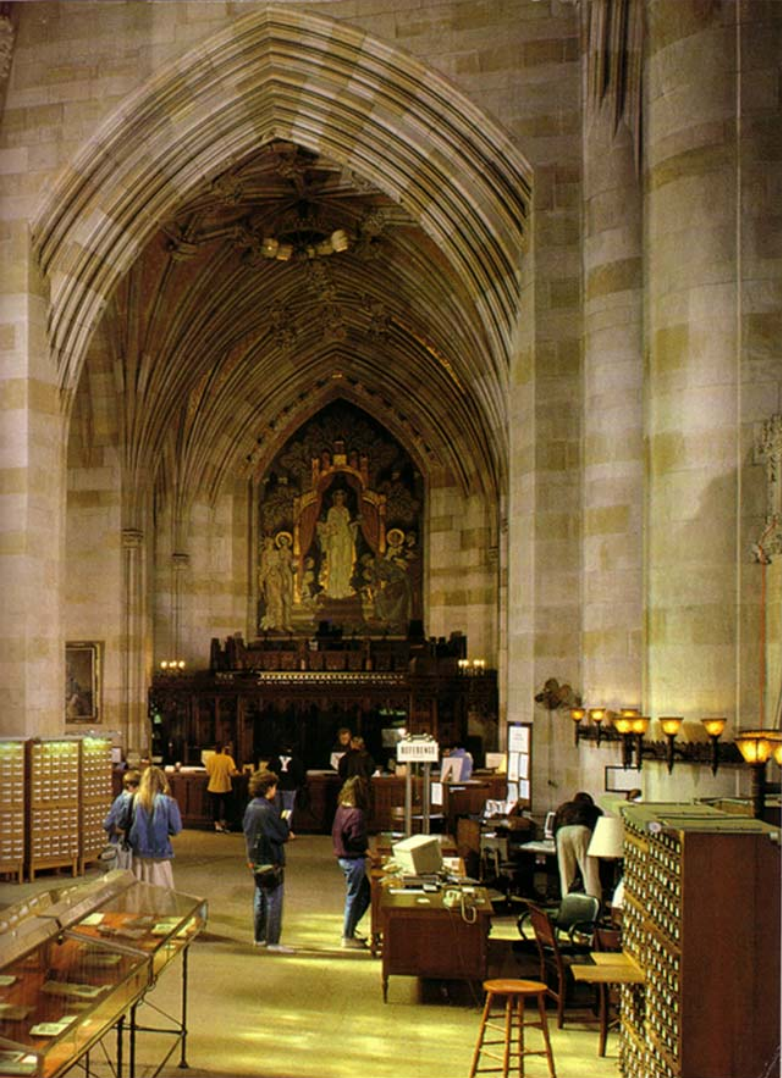


**建築学部の連帯感を作っている中心部の吹き抜け空間。2層の製図室スペースがセンターの批評スペースを取り囲むように構成されている。**

私が一番楽しみにしていたのは、学期末にある各デザインスタジオの「デザイン・ジュリー」と呼ばれる、学生の作品発表会であった。各スタジオに有名な建築家を招いて、学生の作品についてのフリーディスカッションをするのである。リチャード・マイヤーのデザインスタジオのジュリーの時には、マイヤーの友人のホワイトグループとよばれる（白色の建築を設計している建築家）ニューヨークファイブとよばれていたアイゼンマン、グループス、ヘダック、シーゲル等の有名な建築家の顔がそろって、学生の作品を批評しながらのディスカッションは大変興味あるものであった。学年ごとにデザインスタジオが沢山あるので、学期末には有名な建築家が沢山集まり、有名な建築家のコンベンションの様に

**特別ジェラーとしてのポール、ルドルフの学生の作品の批評、  
彼は図面を理解するのが速く、厳しい質問やコメントをした。**





イエール大学の威厳誇るイギリスゴシック建築の  
メインライブラリー



イエール大学アイスホッケーリング、サリネン設計—1958年  
構造の圧縮と張力を利用して大空間を創り上げている。



イエール大学の学生、研究者の既婚者用のハウジング、  
夏は暑く、冬は寒い住居だった。ルドルフ設計 1959年

なった。私は自分の作品の批評を聞くだけでなく、他のスタジオにも行き、それぞれの批評を聞いてまわった。充実した楽しい時であった。

しかし、すべてが楽しい事ばかりではなかった。授業料も生活費も2年はおろか半年分しかなかったもので、最初の年は、朝早く起きて電車でニューヨークまで行き、かつて働いていた設計事務所から設計の仕事ももらって、授業が始まる9時迄に大学にもどってきた。夜と週末にその図面を完成させて、次の週にニューヨークまでその図面を持って行った。

雪の降った朝、5時頃、バス停でバスを待っていた時、その寒さは身にしみた。ニューイングランド地方の冬はたいへん寒かった。

なおみは、外国人学生のワIFEの為の英会話のクラスに通っていた。しばらくすると、イエール大学の図書館でライブラリアンとして働ける様になった。住友財閥が寄付をして、日本語文学のセクションがあったのである。彼女はけっこう自由な時間が多く、よく建築学部の建物に来て、レクチャーを聴いたり、デザインジュエリーを聴いたり、半分学生気分イエール大学のキャンパスの中を歩いていた。スライドショーや図面等をとうしての話なのでなんとかわかり大変おもしろく勉強になるといった。

大学院2年目には、イエール大学の既婚者用の学生のハウジングに入ることが出来た。この建物はポール・ルドルフの設計であり、空間構成的には大変おもしろく、生活しやすい住居であったが、断熱材が十分でなく、暖房があまりきかず冬は寒いアパートであった。又、幸運にもニューヘブンの街の建築設



ハビタ、モントリオール、モシャザウデ設計 1967年  
積み木を重ねあげたような集合住宅であった。



トロント市庁舎、カナダ、レヴェル設計 1959年  
機能的には？だが綺麗なプロポーションの建築であった。

計事務所でパートタイムの仕事が見つかった。授業の合い間や、冬、春、夏休みに働くことが出来た。この事務所では、高層の集合住宅の基本設計から実施設計までさせてもらうことが出来た。休みになると古いフォードの車に乗って、ニューイングランドの建築や街並みを見る為に旅行をした。古い建物が多く、自然の中におさまっていて美しく、文化があると思った。斬新なデザインの建築が多いカナダ、モントリオールやトロントへも出かけていった。特にケベックはフランス文化が深く根付いていて建築や街並みも異なり、シンプルで美しい。ナイアガラの滝は、夏と冬の景色はだいぶ異なる。冬は滝つぼの川は完全に凍り、滝の水によって、その氷がどんどんもりあがっていた。一人の若者が、そのデコボコにもりあがった氷の上を跳んで歩いてカナダまで行こうとしていた。川の間の中のところまで行った時アメリカの移民局の係官が“カンバック！”と叫んでいた事を思い出す。

又、外国人学生達を面倒みってくれる、私たちのホストファミリーはたいへん親切だった。クリスマスパーティー、感謝祭、バースデーパーティー、バーベキューパーティー等、何か催しものがあると、よくディナーやランチに招待してくれた。アメリカの生活や文化にとけこむことが出来て、たいへん楽しいひと時であった。ホストファミリーの人たちとイェール大学とハーバード大学戦等のフットボールも見に行った。又、友人の一人がアイス

氷河となった冬のナイアガラの滝つぼ、天気の良い日は水しぶきに反射して年中虹がかかっている。

夏に船で滝つぼの近くまで行くと水しぶきが雨のように舞ってきた。





ホストファミリーの家で夏、バーベキューパーティー、  
子供が多くいつも笑いが絶えない家族であった。



フットボール、1974年冬、イエール大学対ハーバード大学戦  
この時イエール大学は負けたがみんな楽しそうだった。

ランのなかったからである。マーケットでの買い物は10ドルでショッピングバッグいっぱいになった。それが1週間の食費分であった。

ホッケーの選手だったので近くにあるサリネンの設計したアイスホッケースタジアムに練習試合を何度か見に行った。経済的に余裕がないながらも出来るだけアメリカの大学の生活をエンジョイしようと思った。

日本人の学生は、イエール大学の建築学部の大学院には、毎年1人くらいずつ入学

してくるようである。私がイエール大学院に入った時、一年上のクラスに、東京大学より石井和紘氏が来ていた。又、後に東大の教授となられた、香山先生も特別研究ということで、ビンセント・スカリー教授のもとで研究をされていた。

イエール大学は建築学部の他にも法学、医学、経済学部等が大変優れており、日本の政府や大手の企業等から“キャリア”と呼ばれる、将来の日本を背負う人達が各大学院に送られて来ていた。私の様に個人で、しかも働きながらイエールの大学に通っている日本人はいなかった。働きながらイエール大学の大学院に通っている日本人の学生の話など聞いたことがないし、信じられない、と私のことを知った日本から来た日本人の学生達は言っていた。驚きと半分同情されたが、他人が思うほどに厳しくもなく、又、苦しくもなかった。それどころか幅広く生きることが出来た。これは建築家にとって大切な生き方なのだと思う。ニューヘブンは田舎街であったので生活費は安くあげることが出来た。それは街には日本食のマーケットも日本レストラン